



大町の字(あざ)割り

大町は全国に点在する地名で、近世初期に開発されたところが多いようです。しかし、中世からの歴史をもっと大きく発展した長野県の大町市もあります。

町というと、人家の込み合った地域を連想しますが、町とは、「田んぼの区割り」という意味をもち、また、土地の広さ(面積)や長さ(距離)などの単位にも使われています。では、本市の大町はどのような意味から付けられたのでしょうか。

大町は、地域の東北部の台地一帯を占めています。こうした広い(大きい)地域というところから、土地の広さの単位としての町が使われ、大町と呼ばれたものと考えられます。

この地域は、今から三百二十〜三十年前の寛文年間(一六六一〜七三二)に新田村として開発されたところから、「大町新田」と呼ばれてきました。村の中央には、

## 寛文年間に新田開発

### 大町

松戸から迂回して木下(きおろし)方面に通じる街道が通っています。この街道から直角に枝道が延び、耕地が整然と整えられています。農家は街道に沿って点在しました。同じく街道沿いにある日枝神社は、この村の鎮守として祭られたものです。

大町新田の東部には、市営霊園側から深く入り込ん

だ谷津があり、これは大野町に属し「長田谷津」と呼ばれていましたが、現在は自然観察園になっています。この谷津の東側の台地は小字(こあざ)を千駄刈、千駄山、千駄木、千駄萱と呼びましたが、これは薪や萱がたくさん採れたことからついたものと思われま。薪や萱は村の共有として使われましたが、余った分は行徳製塩の燃料にされたということ事です。

大町新田ははじめ大柏村に属していましたが、昭和二十四年市川市に合併しました。そして二十六年、新田を除いて「大町」と改称されたのです。

この地域は、明治末期から大正期にかけて梨栽培が急速に進展し、梨園が増加して農産物の中心になりました。しかし昭和十八年、戦時中の食糧増産のため梨の伐採命令が出され、梨園は一部を残して芋類などの戦時食生産のための畑に変わりました。戦後の昭和二十四年ごろから梨栽培が復活し、品種、栽培方法などが研究改善され、梨は地域における生産の主体として復活しました。

この地域にはまだまだ自然が多く残り、そうした中にブラネタリウム室を備えた少年自然の家、動植物園、自然博物館などが建設されています。

次回は「田尻」を予定しています。

(社会教育指導員

綿貫喜郎)